

九州産業大学人間科学部スポーツ健康科学科の取り組み

日時：平成31年1月24日(木) 10:30～12:00

訪問先：九州産業大学

担当者：蔦木新氏(九州産業大学人間科学部スポーツ健康科学科 講師)

報告者：スポーツ研究所所員(佐藤雅幸、飯田義明、相澤勝治、柏木悠)

1. 九州産業大学について

九州産業大学は、博多駅から5駅目(九産大前)の福岡市東区にある文系、理系、芸術系の9学部20学科で構成される総合大学である(図1)。学生数は、11,477名(男性:8013名、女性:2434名)であり、この規模は、福岡大学そして九州大学に次ぎ、九州で3番目の規模を誇る。建学の理想は、「産学一如」であり、「産業と大学は車の両輪のように一体となって時々の社会のニーズを満たすべきである。」と掲げている。大学の沿革は、1960年(昭和35年)に九州商科大学商学部商学科の単科大学として開学し、2020年には、創立60周年を迎える。大学の特徴としては2002年に常設の美術館を設置するなど2013年までは、九州で唯一の大学美術館であった。大学内のクラブ活動では硬式野球部が2005年の明治神宮大会で優勝するなどスポーツ活動にも力を注いでいる。更に、2008年より大学のクラブの特色を活かし、九州産業スポーツフェスタ「中学生硬式野

球大会、ジュニアサッカー大会、空手道大会、少年剣道大会、ソフトテニスクリニック、スポーツ講演会」の開催や、「ジュニアアート講座」などスポーツ・芸術活動を通して地域への社会貢献も行われている。

2. 人間科学部について

人間科学部は、2018年度から開設された新学部であり(図2)、臨床心理学科、子ども教育学科、スポーツ健康科学科の3学科から成り立つ。学生数は現在初年度で臨床心理学科74名、子ども教育学科32名、スポーツ健康科学科83名の1学年計189名である。臨床心理学科は主に認定心理士や精神保健福祉士の育成、子ども教育学科では保育士の育成、そしてスポーツ健康科学科では、中高保健体育教員、健康運動指導士、JATI日本トレーニング指導者育成のカリキュラムが組まれている。

本報告ではスポーツ健康科学科の研修内容を報告する。

3. スポーツ健康科学科について

学科の施設は、昨年の3月に竣工されたばかりの8階建てで、芸術学部や美術館が大学に設置されていることから、施設内は非常にデザインに優れていた造りとなっていた(図3)。今回の研修会では、スポーツ健康科学科の蔦木新先生(専門分野は、運動生理学、生化学)に施設内を案内して頂いた。まだ、新設されて1年も経っていないため、今回の研修会では、主に施設見学を中心に行いながら、この新設されたスポーツ健康科学科がどのような方針を持って学生への教育、研究そして社会貢献を目指していくのか意見交換を行いながら進めて頂いた。まず、初めに研究分野ごとの実験室を案内して頂いた。バイオメカニクス実験実習室には、8台のモーションキャプチャーシステムと4枚のフォースプレートが埋設され、実験室のサイズも非常に大きく、大型プロジェクターも常備されているため、実験だけでなく、演習なども行えるように整備されていた



図1 九州産業大学 正門前で



図2 人間科学部



図3 3号館人間科学部エントランス



図4 バイオメカニクス実験実習室

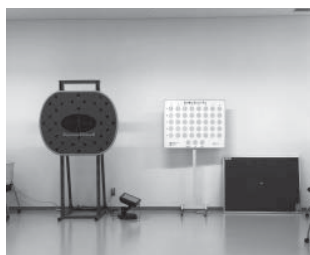


図5 スポーツ心理学実験実習室



図6a 運動生理学実験実習室

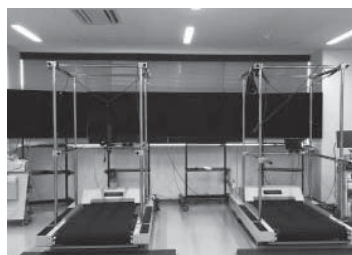


図6b 大型モニター、トレッドミル

(図4)。その他には、水中で使用できるモーションキャプチャーシステム、筋力測定器や超音波測定器など最新の研究機材が導入され、バイオメカニクス研究のほぼ全ての実験が網羅できる環境が整っていることに感激した。次に案内された施設は、スポーツ心理学実験実習室であった(図5)。ここにも脳波計を始め、認知トレーニングや動体視力測定器などほぼ全ての計測器が揃えられていた。そして、最後に訪れた実験室は、運動生理学実験実習室であった(図6a)。数多くの自転車エルゴメーターや、トレッドミル、高酸素トレーニング機器に留まらず、それぞれの有酸素系マシンの前に学生や被験者の動画鑑賞用のモニター、なかでもトレッドミルの前には、大型モニターが4枚も設置されていたことに驚かされた(図6b)。

全ての実験実習室やゼミの演習室などには、電子黒板が常設され、更にネットワークの構築によって、授業の板書の内容などを電子ファイルで記録し、別の教室でのデータを読み込みなど、研究機材だけではなく、授業の運営をより効率的に行う教育設備が整えられていた(図7)。その他に施設の各階には、COMMONSルームが設けられ(図8)、気軽に教員と学生のコミュニケーションを取れる

ような部屋が完備されていた。現在設置されている実験室は仮の施設であり、2020年の竣工を目指した新たな複合的総合体育館内に移設する予定である(図9)。

一般入試および通常型・スポーツAO入試を設定していることから、あくまで、体育・スポーツの指導者育成を目指していることが伺える。九州産業大学の9割の学生が九州地方出身であることも、地域に根付いた体育・スポーツの指導者を今後どのような育成ができるかが重要であると葛木先生が課題を挙げていた。最後に訪れた現在の健康・スポーツ科学センター、体育館施設は、古いながらも床は綺麗にワックス掛けされ整備されていた(図10)。このよう施設の使用状況からも大学教養体育が長い間大切にされてきたことが伺える。つまり、大学として体育・スポーツの重要性が受け継がれ、その基盤をもとに、スポーツ専門学科が開設されたことに九州産業大学の今後のポテンシャルを感じられた。まだ、開設され1年経っていないが、これまでの大学クラブ活動(図11)やスポーツを通じた地域貢献の蓄積とスポーツ健康科学科とのコラボレーションから体育・スポーツ科学に関する新たな情報から九産大から発信されることを期待したい。

4. 所感

キャンパス内に美術館を初め、「柿右衛門様式窯」(図12)や整った庭園があり、更に大学の中心広場は芝生で覆われた野外ステージまでが設置され、まるで外国の大学キャンパスにいるような雰囲気さえあった(図13)。その片鱗は、都内の高級ホテルのようなトイレ環境も施されており、これまでに大学の施設で感じたことのない美的センスがあった。その背景には、女子学生数を増やしたいという大学の戦略であるようだ。女性アスリートの研究に取り組んでいる所員と顔を見合わせて目が点になるほどの驚きと、何か今後の研究アイデアになると感じた。博多の山々の自然に囲まれ、時間の流れがゆっくり感じられる一方で、最新の研究設備が整った環境を見学し、刺激と同時に自分の研究活動に焦りも感じた研修会であった。まだ、スタートしたばかりで色々と問題もあり、その一方で、一から作り上げていく楽しさもあると葛木先生は楽しそうであった。

最後にテスト期間の忙しい時期に、急なお願いを受け入れて頂き、お時間を割いて頂いた葛木新先生に厚く御礼を申し上げます。



図7 常設の電子黒板



図8 各階のCOMMONSルーム



図9 建設中の総合体育館(2020年竣工予定)



図10 現在の体育館



図11 学内のクラブ活動の広報



図12 柿右衛門様式窯



図13 キャンパスメイン広場